

南

島原市は県内最大の桃の産地。六月上旬、深江町にある「ふくはちファーム」を訪ねると、ピンクに色付いた桃がたわわに実っていた。

ハウスは雲仙普賢岳の麓に位置する。福島慎司さんは「以前、この場所には私の家と牛舎がありました。しかし平成三年に発生した雲仙普賢岳の大火砕流によって、すべてを失くしてしまいました。私が中学二年生の時のことです」と話す。

それまで葉タバコ栽培や畜産を生涯にしていた福島さんの両親は、復興への道のりを歩む中で、農家仲間と話し合い、桃の栽培を始めることを決意したという。初めての作物にチャレンジするとあって当初は不安も大きく、苦労は並大抵ではなかった。そのため福島さんが農業を継ぎたいと言いついた時は反対されたという。ようやく両親の許しを得て、家族で桃の栽培に取り組み始めたのは、今から七年前のことだ。

福島さんが最も大切にしているのは、土づくり。「極端に言えば、良い土ならどんな作物もうまく育ちます。逆に土づくりが出来ていないのに、栽培技術を磨いても良いものは作れません。農業は土が命なんです」。こうした信念のもと、福島さんは一年以上かけて堆肥を手作りしている。堆肥が施された畑は土本来の力を発揮し、桃の木は甘い実を付ける。

現在、ふくはちファームには六種二百五十本の桃の木が植えられている。ふくよかな甘みが特徴の「日川白鳳^{ひくわう}」や、さっぱりとした甘さの「あかつき」など、品種によってその味わいはさまざま。福島さんは今後、「品種を増やすことはもちろん、収穫体験ができる農家民宿や、地元の食材を楽しめるレストランを開きたいですね」と目を輝かせた。

家屋だけでなく、手塩にかけて育てた牛までをも奪った雲仙普賢岳噴火災害。しかし福島さんは普賢岳を憎んではない。「何度も何度も噴火を繰り返してきたからこそ、こんなにもミネラルが豊富で水はけの良い土地となったのです。こうして美味しい桃ができるのも、普賢岳のおかげだと思っています」。福島さんは大地の恵みをかみしめている。



桃

Peach

いくつもの困難を乗り越えて生まれた至福の味わい。

「桃は手をかければかけただけ応えてくれます」と言う福島さん。

「収穫の見極めは難しいですね」と話す小夜子さん。

経験を積んでも緊張するという収穫作業。

妻の小夜子さんとはとても仲良し。2人の温かな雰囲気が素敵だった。

美味しい桃は、大自然に育まれる。

